

2017年8月6日

「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。」 ヨハネ7：37

主イエスは、「霊的な岩」（Iコリント10：4→出エジプト17：6）として、すべての人に救いの水を与えたいのです。

仮庵の祭りでは、シロアムの池の水を汲んで神殿に供える儀式がありました。荒れ野で旅をする民に、主なる神は岩から水を出して飲ませられましたが、その水を私が与える、と「イエスは立ち上がって大声で言われ」ます。渴きを自覚していない人も招かれます（熱中症！）。

主のもとに来るとは、「足で歩いてではなく、信仰による」（カルヴァン）のであり、主を信じてつながること（15：5）です。その人は「喜びのうちに救いの泉から水を汲む」（イザヤ12：3）こと（教会生活）によって、「内から生きた水が川となって流れ出るようになる」でしょう（→4：14、エゼキエル47章）。

主は、「信じる人々が受けようとしている“霊”（聖霊）について言われた」のだ、と使徒ヨハネは説明します。その時は「まだ（十字架と復活という）栄光を受けておられなかった」のですが、やがてペンテコステの時に聖霊が来られて、救いの水が世界中の人々に及びます。

主は、「渴いている人はだれでも」招かれます。「行けども行けども、ただ砂原」のような人生の中で、「生命の泉」（讃244番）に来て飲む人は幸いです。

2017年8月13日（召天者記念礼拝）

「それから、イエスはたとえを話された。『ある金持ちの畑が豊作だった。』…」 ルカ12：16

召天者を記念する礼拝で、本当の安心（心の平安）とは何か、主イエスのたとえ話から教えられたいと思います。

親の遺産分配のことで不満を持つ弟が主に調停を頼みますが、日頃は親身に生活のことを心配される方が、それは「貪欲」であって、「有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることも出来ない」と言われます（本当の人生の豊かさとは何か？）。

主は、ある金持ちの話がされますが、彼は人生の成功者です。「作物…（複数の）倉…穀物…財産」は皆「私のもの」であり、「思い巡らす」（自分と対話する）だけで、神と対話することはなく、「自分（の魂）」に言い聞かせます。「ひと休み（安心）して、食べたり、飲んだりして楽しむ」とは理想の老後プランです！

しかし神は、その男を「愚かな者よ」と呼ばれます。何故なら、「お前の命は（神によって）取り上げられる」時が必ず来るからです。彼は、「自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者」です。その反対に、神を知り、神が与えてくださった命を大切に生きる者は幸せです（→105歳の日野原重明医師）。

苦しみや悩みがあり、波風が多い人生でも、主を知る者は、「安かれ、わが心よ」（讃298番）と歌うことが出来ます。

2017年8月20日

「このように言う者もいた。『メシアはガリラヤから出るだろうか。…』」 ヨハネ7:41

仮庵の祭りに集まったユダヤ人たちの反応です。大切なのは、素直に主イエスを見、その言葉を聞くことです。

主の「渴いている人は…飲みなさい」という説教に感動した人たちもいましたが、「メシアは…ベツレヘムから出る」はずで、ガリラヤのような辺境の地から出るはずはないと言う者もいます。

そういう中で、「祭司長たちとファリサイ派の人々」が遣わした「下役たち」（神殿警備隊員）が帰って来ます（→7:32）。彼らは実際に主の話聞いて、「今まで、あの人のように話した人はいません」と感動したのです。指導者たちは怒って、「律法を知らないこの群衆は呪われている」と軽蔑しますが、どちらが本当でしょうか（「裸の王様」！）。

「以前イエスを訪ねたことのあるニコデモ」（→3:1）は大胆にも主イエスを弁護して、「我々の律法によれば…」と正論を述べます。「彼があえて一言口に出したということは、小さいながら彼の心から出た一つの閃光」（カルヴァン）でした（後にクリスチャンになった彼の証し！）。他の指導者たちは「あなたもガリラヤ出身なのか」と馬鹿にします。

主イエスをよく見て、否定的な意見に惑わされず、「イエスキミはいとうるわし」（讃166番）と歌う者は幸いです。

2017年8月27日（三教会交換講壇）

「蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、…大きな枝を張る。」 マルコ4:32

主イエスは、『神の国』を種まきに譬えてお話になりました。目に見えないような隠されている事実を、生活の中で思い浮かべるようにして語られたのです。

『種を蒔く』ことの目的は、収穫にあります。石地の道に蒔かれたり、茨の茂る中では、種は芽を出すことは出来ても成長して収穫の実を頂くことは出来ないようですね。しかし、私たち人間には、それがどうして成長して実をつけるのか分からないと聖書は告げます。それが日常ではないでしょうか。

ヨハネ20章29節「イエスはトマスに言われた。『わたしを見たから信じたのか。見ないで信じる人は、幸いです』」とあります。頭では理解できても、信じていない時、神が蒔いて下さった私たちの中にある種（御言葉）が、芽を出しても成長しないように、自分の中にないように思うようです。

Ⅰペトロ1章23節「あなたがたは、朽ちる種からではなく、朽ちない種から、…神の変わることはない生きた言葉によって新たに生まれたのです。」日々、悔い改めて新しい人に生まれ変わらせて下さる神の業（御言葉）に、より頼みましょう。

「大きな枝を張る」証しを、9月18日に皆さんと共に祝いしようではありませんか（詩編119編105節）。（高橋牧師の説教要旨）